

62.五積散

参考文献名		朮	蒼朮	白朮	陳皮	茯苓	半夏	当帰	厚朴	芍薬	川芎	白芷
診療医典	注1	2	2	-	2	2	2	2	1	1	1	1
治療の実際	注2	3	-	-	2	2	2	2	1	1	1	1
処方解説		-	2	2	2	2	2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
応用の実際		3	-	-	2	2	2	2	1	1	1	1
基礎と診療		-	-	3	3	3	3	3	3	3	3	3
漢方処方集		-	-	3	3	3	3	3	3	3	3	3
処方分量集		2	2	-	2	2	2	2	1	1	1	1
漢方処方		-	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1

参考文献名		枳殻	枳実	桔梗	桂枝	麻黄	大棗	生姜	乾姜	甘草	香附子
診療医典	注1	1	-	1	1	1	1	1	1	1	-
治療の実際	注2	-	1	1	1	1	1	1	1	1	-
処方解説		1.2	-	1.2	1.2	1.2	1.2	-	1.2	1.2	1.2
応用の実際		-	1	1	1	1	1	1	1	1	-
基礎と診療		3	-	3	1.5	2.5	2	2	1.5	1	-
漢方処方集		3	-	3	1.5	2.5	2	-	1.5	1	-
処方分量集		1	-	1	1	1	1	-	1	1	-
漢方処方		-	1	1	1	1	1	1	1	1	-

〔注1〕 寒冷や湿気にあてられて起こる病気に用いられ、貧血ぎみで上半身は熱し、腰、股、下腹など、下半身の冷えるもの。

胃腸炎、腰痛、神経痛、リウマチ、月経困難症、帯下(こしけ)、かっけ、打撲、冷え症、いわゆる疝気、月経痛、心臓弁膜症、中風、老人の軽い感冒など。

〔注2〕 腹が冷えて痛む、腰から股にかけて筋がはる。上半身が熱し下半身が冷える、下腹が痛むもの、腰痛、冷え症、難産。

〔注3〕 急性慢性胃腸炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃酸過多症、胃痙攣、疝気(腸神経痛)、腰痛、坐骨神経痛、諸神経痛、リウマチ等。

白帯下、月経痛、月経不順、半身不随、難産催生剤(酢を加える)。

処方番号：63

処方名：五物解毒散（ごもつげどくさん）

処方構成：

川芎 5、金銀花 2、十葉 2-3、大黃 1、荊芥 1.5

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上のものの次の諸症

効能・効果：

かゆみ、湿疹

原典：校正方輿輒

出典：

解説：

魚腥湯に荊芥を加えた処方である。治りにくい湿疹や先天梅毒の解毒剤として用いられる。

63.五物解毒散

参考文献名		川 芎	金 銀 花	十 薬	藪 菜	大 黄	荊 芥
処方分量集		5	2	-	2	1	1.5
診療の実際	注1	5	2	2	-	1	1.5
診療医典	注2	5	2	2	-	1	1.5
症候別治療		5	2		3	1	1.5
処方解説		-	-	-	-	-	-
後世要方解説		-	-	-	-	-	-
漢方百話		-	-	-	-	-	-
応用の実際		-	-	-	-	-	-
明解処方		-	-	-	-	-	-
漢方処方集		-	-	-	-	-	-
漢方入門講座		-	-	-	-	-	-
漢方医学		-	-	-	-	-	-
精撰百八方		-	-	-	-	-	-
古方要方解説		-	-	-	-	-	-
成人病の漢方療法		-	-	-	-	-	-

【注1】 麻疹軽快後屢々全身癢痒を訴え、小発疹を繰返すことがある。これは餘毒が尽きないものでこの方をもって解毒清解させる。先天梅毒一般の解毒剤として用いられる。

【注2】 麻疹 病状がほぼ治ったあと、全身に癢痒を訴え、小発疹を繰返すことがある。このような場合に用いる。先天梅毒に対して一般的に解毒剤として用いられるものである。

参考：橋本方輿輓 有持桂里先生口述

魚腥湯「此方ハ一通ノ解毒ノ劑ナリ。オヨソ微瘡ニテ格別ノ証候ナキトキハ、此方ニテオシテヨキナリ。何ソ制セネハナラヌ事アレハ、ソレゾレノ方ヲ用レドモ不然トキハ此方ヲオスナリ。オヨソ解毒ノ劑華方ニテ搜風解毒ヲ始トノ和方ニモイロイロアレドモ此方純粹ニソノ効アリ。故ニ解毒ノ劑ハ此一方ニテカタツケテヨキ程ノモノナリ。此上ニ荊芥ヲ入テ五物解毒湯ト云ナリ。金銀花ハ忍冬ニテモヨシ、……又此方多クハ荊芥ヲ入カヨキナリ。荊芥ハ發ソ解毒スル者ニテ安排ノヨキモノナリ。故ニ今ハ大抵ハ荊芥ヲ加用ルナリ。上部下部ノ毒ニ拘ラス荊芥ヲ加ヘシ搜風解毒本草ニ見ユ…山脇ノ六物解毒湯ナドモ此方ヲ増損セシモノナリ。此魚腥湯槩ソ微毒一切ニ用ユ。

四物解毒即魚腥湯ハ痔瘻瘰ナドニモヨシ……濕毒骨痛ノ新シキ者ハ魚腥加荊芥ニテ大抵治スルモノナリ。魚腥加荊芥ノ場ハ何レ表ニ動テアル者ナリ。若裏ニ沉痼ノ表ニ動ナキ者ハ化毒丸ノ類ヲヤルヘシ。

魚腥湯ヲ用ルニ微瘡ノ發シカケタリ骨痛ノ催アルモノハ荊芥ヲ加フ……」。

処方番号：64

処方名：五淋散（ごりんさん）

処方構成：

茯苓 5-6、当帰 3、黄芩 3、甘草 3、芍薬 2、山梔子 2、地黄 3、沢瀉 3、木通 3、滑石 3、車前子 3
（地黄以下のない場合も可）

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度のものの次の諸症

効能・効果：

頻尿、排尿痛、残尿感、尿の濁り

原典：太平恵民和剤局方

出典：万病回春

解説：

尿道炎・膀胱炎・尿路結石など膀胱に熱状があり血尿を伴うものに用いられる。

64.五淋散

参考文献名		茯苓	当帰	黄芩	甘草	芍薬	山梔子	地黄	沢瀉	木通	滑石	車前子
診療医典	注1	6	3	3	3	2	2					
処方解説	注2	5	3	3	3	2	2					
治療の実際		6	3	3	3	2	2	3	3	3	3	3
応用の実際	注3	6	3	3	3	2	2	3	3	3	3	3
診療の実際		6	3	3	3	2	2					
処方集	注4	6	3	3	3	1	1					
民間薬百科	注5	6	3	3	3	2	2					
処方分量集		6	3	3	3	2	2	3	3	3	3	3

〔注1〕 慢性に経過した尿道炎

〔注2〕 熱膀胱にあり、淋瀝・難尿・血尿・膿尿・沙尿・膏尿などを治す。すなわち、尿道炎・膀胱炎、膀胱結石・腎臓結石・淋疾・虫垂炎

〔注3〕 尿が出にくく、淋瀝するもの、尿は混濁したり、血尿や膿尿が出たりするものを目標とする。

膀胱炎、尿道炎、淋疾、衰弱などによる排尿異常に用いられる。

〔注4〕 膀胱に熱があり、小便淋瀝、排尿困難、或は血尿、膿尿、泥膏状の尿を出すものを目標とする。

尿道炎、膀胱炎、膀胱結石、淋病などに用いる。

〔注5〕 小便が近くて、1回の量が少なく、あるいは小便の出るときに尿道が痛み、尿が混濁するもの、また血尿の出るものを目標とする。

膀胱炎、尿道炎、尿管結石に用いる。また地黄のはいった八味丸のような処方が、胃腸にさわる人があるが、そんな場合に五淋散を用いる。(それでもなお胃腸の悪い人は、清心蓮子飲を用いる。)

処方番号：65

処方名：五苓散（ごれいさん）

処方構成：

沢瀉 5-6、猪苓 3-4.5、茯苓 3-4.5、蒼朮 3-4.5（白朮も可）、桂枝 2-3

用法・用量：

（1）散：1回 1-2g 1日3回

（2）湯

しばり：

体力に無関係に広く応用できる。のどが渇いて尿量が少ないもので、めまい、はきけ、嘔吐、腹痛、頭痛、むくみなどのいずれかを伴う次の諸症

効能・効果：

水様性下痢、急性胃腸炎（しぶり腹のものには使用しないこと）、暑気あたり、頭痛、むくみ、二日酔い

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

解説：

胃内停水に用いる薬方である。裏位に停滞した水毒が表位の熱邪のために動かされ表位に上逆しあるいは内位に亡動して起こる種々の症状に用いる。したがって口渴、小便不利の主症状に発熱、頭痛、めまい、腹痛、下痢、浮腫、水をのむとすぐ吐逆する者、などの症状のいずれかのある者に用いる。

『方函類聚』に「猪苓、沢瀉、茯苓、桂枝、蒼朮。以上五味、加車前子薏苡治陰囊赤腫、脹痛、加附子商陸治腫滿。小便不利力正面ナレトモ水逆ノ嘔吐ニモ用ヒ、又蓄水ノ顛眩ニモ用其用広シ新ニ末ニシテ興フベシ煎劑ニテハー等下ル。又疝ニテ烏頭桂枝湯ヤ當歸四逆湯ヲ用テ一向ニ腰不伸諸藥効ナキニ五苓散ニ加茴香ニテ妙ニ効アリ是腸間ノ水氣ヲ能逐ガ故ナリ」とある。

65.五苓散

参考文献名		沢瀉	猪苓	茯苓	白朮	朮	桂枝	用法・用量
処方分量集		5	3	3	-	3	2	散 *1
診療の実際	注1	6	4.5	4.5	-	4.5	3	湯
		5	3	3	-	3	2	散
診療医典	注2	6	4.5	4.5	-	4.5	3	湯
		5	3	3	-	3	2	散 *2
症候別治療 処方解説	注3	6	4.5	4.5	-	4.5	3	散 *3
		6	4.5	4.5	-	4.5	3	湯 *4
応用の実際 明解処方	注4	5	3	3	3	-	2	湯 *5
		5	4	4	-	4	3	散 *6
漢方処方集		5	3	3	3	-	2	散 *7
		4	3	4	3	-	2.5	湯
基礎と診療 診かた治しかた 实用漢方療法		5	3	3	3	-	2	湯
		5	3	3	-	3	2	散
漢方入門 傷寒論入門		6	4.5	4.5	-	4.5	3	湯
		5	3	3	3	-	2	湯 *8
		2	2	3	3	-	1	湯

*1 以上を細末とし1回量1を重湯または白湯にて服す。

*2 細末とし1日3回1.5ずつ白湯で服用する。

*3 以上煎剤の1日量。粉末として用いる場合は以上の比率で粉末としたものを混和し、1回1宛1日3回重湯でのむ。

*4 細末として混和し、1回1-2を白飲(おもゆ)に溶いて服用し、すぐ温かい湯を多量に飲み、汗が出ると治る。水逆のときは散として用いる。

*5 1日分として、法のごとく煎じ、温または冷服する。水逆、二日酔いのときなどは冷服したほうがよい。少量ずつ服用するとよく納まる。

*6 散剤として1日1-2宛服用する。なお小児で散剤を嫌うときは湯剤にするとのまし易い

*7 便法に五苓散5重湯末1を混合し3回に分服、とある。

*8 各々微細な粉末となして混和し、白飲に混入して1宛服用すること1日3回せよ。服後煖水を多量に呑んで発汗を促すときは治癒する。容態を斟酌して分量および回数を、桂枝湯を服用するときの如く加減せよ。

【注1】 口渴と利尿減少を目標として諸種の疾患に応用される。脈は浮弱のことが多い。また口渴があって煩躁し水を飲まんと欲し、水が入ればすなわち吐する者にも用いられる。熱の有無に関らない。

【注2】 表に邪熱があって、裏に停水のあるものを治する効があり、口渴と利尿の減少を目標にして、諸種の疾患に用いられる。また水逆の嘔吐も、本方の目標である。

【注3】 胃内(あるいはその他体腔内)に停水があって、気の上衝、あるいは表証をともなっているものである。口渴と小便不利があって、気の上衝のため嘔吐があり、または涎沫を吐し、激しい頭痛や眩暈のあることもあり、表熱の症状がある。脈は浮で、熱があれば浮数となる。あまり強い脈とはならないことが多い。腹は多くの場合、心下部に拍水音が認められる。腹壁は軟かい方で、臍下悸のあることもある。

【注4】 (1) 口渴(のどのかわき)があって利尿が減少する場合で、あるいは嘔吐、下痢、頭痛、浮腫などのいずれかを伴うもの。このとき熱が出る急性症もあり、無熱の慢性症もある。(2) 熱が出て汗をかいたあと、煩躁して眠れず、水のみたがり、利尿が減少し、脈が浮いてふれやすいもの。(3) 暑気あたりで熱が出て、頭痛がしたり、からだが痛んだりして、のどがかわいて水のみたがるもの。(4) 下剤を用いたため心下部が痞え、瀉心湯をのんでも治らず、のどがかわき、口が乾燥して苦しく、利尿が減少するもの。(5) 心悸亢進や腹部動脈の拍動が亢進し、よだれを吐いたり、めまいがするもので、瘦せた人に多くみられる。

処方番号：65A

処方名：茵蔯五苓散（いんちんごれいさん）

処方構成：

沢瀉 4.5-6、茯苓 3-4.5、猪苓 3-4.5、蒼朮 3-4.5（白朮も可）、桂枝 2-3、茵蔯蒿 3-4

用法・用量：

（1）散：散の場合は茵蔯五苓散のうち茵蔯蒿を除いた他の生薬を湯の場合の1/8量を用いるか、茵蔯五苓散のうち茵蔯蒿を除いた他の生薬の合計が茵蔯蒿の半量となるように用いる。

（1回 1-2g 1日3回）

（2）湯

しばり：

体力中等度以上をめやすとして、のどが渇いて、尿量が少ないものの次の諸症

効能・効果：

嘔吐、じんましん、二日酔い、むくみ

原典：金匱要略

出典：

解説：

本方の内容は五苓散に茵蔯蒿一味を加えたもので、五苓散は口渴、利尿減少、便秘、腹満、浮脈であるが、本方は口渴、利尿減少はあっても便秘を訴えることもなく、より軽症で脈も沈である。散剤で用いるのが原方であるが煎剤で用いる方が多い。黄疸のファーストチョイスとして用いられる。

65A. 茵蔯五苓散

参考文献名		沢瀉	茯苓	猪苓	朮	桂枝	茵蔯	用法・用量
処方分量集		6	4.5	4.5	4.5	3	4	*1
診療の実際	注1	6	4.5	4.5	4.5	3	4	*2
診療医典	注2	6	4.5	4.5	4.5	3	4	*3
症候別治療	注3	4.5	4.5	4.5	4.5	3	3	*4
処方解説	注4	6	4.5	4.5	4.5	3	4	*5
後世要方解説		-	-	-	-	-	-	
漢方百話	注5	-	-	-	-	-	-	
応用の実際	注6	5	3	3	3	2	4	*6
明解処方	注7	茵蔯蒿末2、五苓散(沢瀉5、猪苓4、茯苓4、朮4、桂枝3)1、以上の割合で混合し1日6を食前に分服する。						

*1~*4および*6は煎剤で用いるが、*5は五苓散に茵蔯4を加えたものである。と記載されているので、同書の五苓散を記載した。

〔注1〕 口渴、尿利減少のあるもののカタル性黄疸、飲酒家の黄疸、浮腫。

〔注2〕 本方の証では、口渴と尿利減少はあっても、便秘を訴えることはない。

肝炎、腎炎、ネフローゼ、腹水などに用いられ、小柴胡湯に合方したり、大柴胡湯に合方したりする。

〔注3〕 口が渴き、吐き気があり尿量が少なく下痢のある場合の急性肝炎、浮腫、黄疸、嘔吐、尿利減少。

〔注4〕 軽度の黄疸、発熱、口渴、小便不利(腹壁は軟かく、しばしば胃部拍水音を認める。)

〔注5〕 黄疸、浮腫。

〔注6〕 急性黄疸の初期および軽症、酒のわる酔い、二日酔、腎炎、ネフローゼ。

〔注7〕 流行性肝炎、ネフローゼ、腎炎の浮腫、二日酔、黄疸(茵蔯蒿湯に比べて軽度)、口渴はなはだしく尿利減少。

処方番号：65B

処方名：四苓湯（しれいとう）

処方構成：

沢瀉 4、茯苓 4、蒼朮 4（白朮も可）、猪苓 4

用法・用量：

（1）散：1回 1-1.5g 1日 2-3回

（2）湯

しばり：

体力に関わらず広く応用できる。のどが渇いて水を飲んでも尿量が少なく、はき気はきけ、嘔吐、腹痛、むくみなどのいずれかを伴う次の諸症

効能・効果：

暑気あたり、急性胃腸炎、むくみ

原典：牛山方考

出典：

解説：

（1）本方は五苓散より桂枝を去った方剤である。

（2）本方は医師が使用する方剤で、通例は五苓散を用いる。

65B.四苓湯

参考文献名	沢瀉	茯苓	朮	猪苓
処方分量集	4	4	4	4
診療の実際	4	4	4	4
診療医典	4	4	4	4
治療の実際	4	4	4	4
後世要方解説	-	-	-	-
応用の実際	-	-	-	-
明解処方	-	-	-	-

〔注1〕 牛山方考(香月牛山)「暑病大渴熨甚しく戦慄する者には肉桂を去て四苓と名付く。」

〔注2〕 勿誤薬室方函(浅田宗伯)「煩渴飲を思ふを治す。量を酌んでこれに与へ、もし引くこと過多なれば、自ら水の心下に停るを覚ゆ。停飲と名づく説約に云う四苓散は華蒼朮を用ひ、雀目(夜盲症)を治すこと至妙なり。即ち五苓散方中桂枝を去る」

〔注3〕 勿誤薬室方函口訣「此方は能く雀目(夜盲症)を治す。また腸胃の間水気ありて、腑熱下痢する者に、車前子を加へて効あり」

処方番号：65C

処方名：沢瀉湯（たくしゃとう）

処方構成：

沢瀉 5-6、白朮 2-3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力に関わらず広く用いられる

効能・効果：

めまい、頭重

原典：金匱要略

出典：

解説：

原典である『金匱要略』に「心下に痰飲(水毒)がつかえて、そのために頭にものかぶったような感じがしてめまいするもの」とある。漢方の病理の一つに、気血水説がある。気血水の3つの物質が体内を正常に循環していれば健康を維持できるが、その一つでも不足したり、過剰になったり、鬱滞したり、溢れたりすると体調が悪くなるとしている。そのうちの水の運行が悪くなっている状況を「水毒」と言っている。本方ではみぞおちあたりに水がたまり、頭にものかぶったようになり、めまいを起こしたものに使う。一般に、原料の生薬数が少ないほど、急性の症状に使われることが多く、生薬数の多いものほど体質改善など慢性的な目的で使われる。沢瀉湯は沢瀉と朮の二味で構成されていることより、症状が強いときに用いられる。横になっても、目をつぶっていても、ぐるぐる回る回轉性のめまいに使われる。

65C. 沢瀉湯

参考文献名	沢瀉	白朮	朮	用法・用量
漢方診療医典	5		2	
症候による漢方治療の実際 注1	5		2	
1000万人の漢方診断と治療の実際 注2	5		2	
実用漢方療法 注3	5		2	
漢方処方応用の実際	5		2	
経験漢方処方分量集	5		2	
改訂新版漢方処方集 注4	5		2	*1
漢方と民間薬百科 注5	5		2	
金匱要略入門 注6	5	2		*2
増補改訂漢方入門講座 上 注7	5	2		*3
新撰類聚方 注8	5兩	2兩		*4
新古方薬囊 注9	5	2		*5
漢方医学の基礎と診療 注10	5	2		
漢方の診かた治しかた	6	2		
明解漢方処方 注11	6		3	

*1 水80を以て煮て40に煮つめ二回に分服。

*2 以上二味、水200銚をもって煮て100銚となし、50銚を二回温服せよ。

*3 水80.0を以て煮て40.0となし、滓を去り、二回に分服する。

*4 右二味、以水二升、煮取一升、分温再服。

*5 右二味を水四勺を以て煮て二勺となし、滓を去り二回に分ちて温服すべし。

注1

この処方、沢瀉と朮の二味からなる簡単なもので、金匱要略に“心下に痰飲(水毒)がつかえて、頭に何かかぶったようでめまいのするものは沢瀉湯の主治である”とあるように、これも水毒によるめまいに用いる。この処方はいままであげた処方を用いる場合のめまいよりも、はげしいものにも用いる。起き上がったり、歩いたりする時にめまいがするばかりでなく、寝床で静かにして眼をつぶっていても、眼がまわって、便所にもいけないというほどのものに用いることもある。

注2

回転性のめまいに用いる。静かに寝ていても天井がグルグル回るように感じるものによい。本方は水分代謝を助長する沢瀉と朮の二味から構成されている処方である。

注3

これは非常に強いめまいのある人によく用いられます。この処方の症状を、漢方の古書には「身、舟中に座するがごとし」などと形容しています。そのようにグラグラと大波に揺れる船にのっているようだったり、また寝ていても天井がぐるぐると回るように感じたりする、といった、ひどいめまいの場合に、時には劇的に、といっていよいよ効きます。

注4

目標・応用 心下支飲性の冒眩甚だしきもの

注5

頭に何かかぶさっているようで重く、寝ていても、めまいがするものに用いる。めまいが激しく、寝返りもできないものがある。この処方も小便の出の少ないものを目標にして用いる。

応用: 胃下垂症、胃アトニー症、車やふねの酔い、腎炎、めまい。

注6

喜多村直寛は、此は五苓散中に於いて僅かに二味をとる、沢瀉は水道を利し、朮は中気を和すときは、即ち飲を支えるものは去りて、眩冒も亦自ら瘥ゆ。趙氏の謂う所の、薬は品味の多きにあらず、唯だ病に中を要するのみとは是なり、といい、浅田栗園は、按ずるに徐靈胎は、此も亦小便より去るの法なりと曰う。或は、沢瀉は濃煎を忌む、故にこの方は淡煎す。

注7

神農本草經によると白朮は苦温、沢瀉は甘寒である。この苦温は脾陰を補い胃氣を助けものであろう。それによって停飲を逐うことが出来る。沢瀉の甘寒は腎陰を補い且つ心陽を抑えるものであろう。それによって利尿を囿ることが出来る。応用範囲は神経性の眩暈、ヒステリー、トルソー氏胃性眩暈、メニエル症候群、てんかん、耳性眩暈などである。

注8

心下有支飲、其人苦冒眩、本方主之。

注9

澤瀉湯を用いる證

胸中苦しく息切れありて頭モヤモヤするもの、或は頭に物を被りたるが如くにしてめまいする者、胸中つまりて苦しく、めまいありて頭もかぶりたるが如くボーっとする者、小便の出悪しき者。とにかく一番の目の付け処は心下に在り、若し心下胸中等に少しも障り無くして冒眩ある者は本方のゆく所に非ず、故に心下に支飲ありて其の人冒眩を苦しむ者とあるなり。

注10

目まいの薬。本方は、寝ていても家が回るようなはげしい目まいの人によい。平素胃に水がたまって、みぞおちでジャブジャブ音がする人、頭の物を被ったように重く感じる人に適する。

注11

この方は五苓散や当帰芍薬散の原方で、胃内停水あって尿量減少し、目眩劇しく苓桂朮甘湯のような起上るときだけの目眩でなく、眼をつぶっていても天井が回ると訴えるような患者に用いる。内臓にこれといった苦情ないことが目標である。

処方番号：66

処方名：柴葛解肌湯（さいかつげきとう）

処方構成：

柴胡 3-5、葛根 2.5-4、麻黄 2-3、桂枝 2-3、黄芩 2-3、芍薬 2-3、半夏 2-4、
生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 1-2）、甘草 1-3、石膏 4-8

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度以上で激しい感冒様症状を示すものの次の諸症

効能・効果：

発熱、悪寒、頭痛、四肢の痛み、口渇、不眠、鼻腔乾燥、食欲不振、吐き気、全身倦怠

原典：勿誤薬室方函口訣

出典：

解説：

『浅田方函口訣』に「太陽、少陽の合病、頭痛、鼻乾、口渇、不眠、四肢煩疼、脈洪数なる者を治す。」と主治が記載されている。更に口訣として「この方は麻黄、葛根二湯の症未だ解せず、既に少陽に進み、嘔渴甚だしく四肢煩疼する者に宜し。」との記載がある。病邪の力が強力なために病の進行が早く太陽病の症状が治まらない内に既に少陽病さらには陽明病の症状も出てきている場合に適用する。『浅田方函口訣』では太陽少陽二陽の合病としているが、脈洪数、口渇などは陽明病の症状が出てきていると考えられ三陽合病と考えた方が適切である。傷寒で症状の激しい状態に適用機会が多いが、具体的にはインフルエンザで急激に高熱を発し、頭痛、悪寒戦慄或いは悪熱、激しい身体痛などを伴う場合に適用している。インフルエンザでもごく初期は麻黄湯の適応となるが、その時期はごく短く通常受診する場合は殆ど二陽あるいは三陽合病となっていることが多く、麻黄湯の適用期を過ぎていることが多く、その場合、本方が適用となる。

66. 柴葛解肌湯

参考文献名		柴胡	葛根	麻黄	桂皮	桂枝	黄芩	芍薬	半夏	乾生姜	生姜	甘草	石膏	羌活	白芷	桔梗	大棗	用法・用量
漢方診療医典	注1	4	4				3	3		1		2	5	2	2	2	2	
臨床応用漢方処方解説	注2	4	3				3	3		1		2	5	2	2	2	2	
漢方後世要方解説	注3	4	3				3	3			2	2	5	2	2	2	2	
漢方処方応用の実際	注4	4	2.5	2.5		2.5	2.5	2.5	3		2		6					
臨床応用漢方処方解説	注2	4	3	2		3	3	3	3	1		1	5					
漢方治療百話	注5	5	4	3		3	3	3	4		2	2	8					
漢方後世要方解説	注3	4	3	2		3	3	3	3		1.5	1	5					
経験・漢方処方分量集		4	4	2.5	2		2	2	3	1		1	6					
改訂新版漢方処方分量集	注6	4	4	3		2	2	2	4		1	1.5	6					
明解漢方処方	注7	4	3	2		3	3	3	3		1	1	5					
漢方の臨床と処方	注8	3	3	3		3	3	2	2		2	3	4					

注1

・本方は同名異方があるが、一般に浅田家方が用いられている。外感で特殊の病態を呈し、麻黄湯、葛根湯の二証が解消せず、しかも少陽と陽明の部位に邪が進み、嘔や渴がはなはだしく四肢煩疼するのが目標である。桂枝湯や麻黄湯で発表しても快癒せず、汗が出ないでかえって熱勢が加わり、柴胡の証も現われるが表証は去らず、口渴もある。陽明の証の如く、また白虎湯のようにもみえる。熱が激しく頭痛、身体疼痛、衄血などがあり、上部に熱がうっ塞して、はなはだしいときは譫語狂躁の状を呈するに至ることもある。頭痛、口渴、不眠、鼻乾き、または衄血、悪寒して汗なく、四肢痛み、脈は洪数というのが目的である。本方は、葛根湯と小柴胡湯とを合せて石膏を加えたもので、太陽と少陽と陽明と三陽の合病を治する。柴胡、黄芩、半夏、芍薬、甘草は心下部、肝部、胸脇を緩め、少陽の熱を解し、葛根、桂枝、麻黄、芍薬は太陽の熱を解し、石膏は陽明の熱をさますものである。以上の目標を以て、本方は流行性感冒、肺炎の一証、諸熱性病の経過中現われる一証に用いる。また肝気亢ぶり興奮して発狂するものにももちいることがある。

注2

・〔目標〕柴胡桂枝湯の証に似たもので、太陽少陽の合病に用いる。目標は頭痛、鼻腔の乾燥、口乾、不眠、四肢煩疼などがあり、本方は、葛根湯と小柴胡湯とを合せて石膏を加えたもので、太陽と少陽と陽明と三陽の合病を治する。柴胡、黄芩、半夏、芍薬、甘草は心下部、肝部、胸脇を緩め、少陽の熱を解し、葛根、桂枝、麻黄、芍薬は太陽の熱を解し、石膏は陽明の熱をさますものである。以上の目標を以て、本方は流行性感冒、肺炎の一証、諸熱性病の経過中現われる一証に用いる。また肝気亢ぶり興奮して発狂するものにももちいることがある。汗が出て、脈が洪数あるいは脈弦長のものである。浅田宗伯は、この処方は父濟庵翁の創案で、六書の柴葛解肌湯より効果があるといっている。

・〔応用〕柴胡桂枝湯に準ずる。

注3

・太陽陽明の合病、頭、目、眼、眶痛み、鼻乾きて、眠らず、悪寒して汗無く、脈微洪を治す。

・浅田家の柴葛解肌湯

・此方は、桂枝湯、麻黄湯にて発表しても快癒せず、汗が出ないで却って熱勢が加わり、柴胡の証があつて表証尚解せず、白虎の浅田宗伯は、この処方は父濟庵翁の創案で、六書の柴葛解肌湯より効果があるといっている。証でもなく、熱が盛にして頭痛、身体疼痛、鼻衄等があり、上部閉塞し、甚だしいときは譫語狂躁の状など生ずるものに用いる。

・浅田家方は麻黄湯、葛根湯の二証未だ解せず、而も少陽に進んで嘔渴甚だしく四肢煩疼するものに宜い。

・応用①流行性感冒、②肺炎の一症、③諸熱性病の一症。

注4

・〔応用〕外感で特殊の病態を呈し、麻黄湯、葛根湯の二証が解消せず、しかも少陽と陽明の部位に邪が進み、嘔や渴がはなはだしく四肢煩疼するものによい。桂枝湯や麻黄湯で発表しても快癒せず、汗が出ないでかえって熱勢が加わり、柴胡の証も現われるが表証は去らず、口渴もある。陽明の証の如く、また百虎湯のようにもみえる。

・〔目標〕桂枝湯や麻黄湯で発表しても快癒せず、汗が出ないでかえって熱勢が加わり、柴胡の証も現われるが表証は去らず、口渴もある。陽明の証のようにも思われるし、また白虎湯のようにも見えるところがある。ただ熱がさかんで頭痛、身体疼痛、鼻衄などがあり、上部に熱が鬱塞して甚だしいときは、譫語狂躁の状を呈するに至ることもある。頭痛、口渴、不眠、鼻乾き、または衄血、悪寒して汗なく、四肢疼み、脈洪数のものが目標である。

・〔方解〕葛根湯と小柴胡湯とを合せて石膏を加えるもので、太陽と少陽と陽明と三陽の合病を治すものである。柴胡、黄芩、半夏、芍薬、甘草は心下、肝部、胸脇を緩め、少陽の熱を解し、葛根、桂枝、麻黄、芍薬等は太陽の熱を解し、石膏は陽明の熱をさますいみである。

注5

・この処方、一昨年流行したA型東京五七型ウイルスによる流行性感冒の際にしばしば経験されたものである。患者は数日間高い熱が出て、頭が割れるように痛み、胸が苦しくなって、口中が粘って乾き、舌は真白くなって、嘔気があつたり腹痛や身体疼痛を訴えたり、食欲が全くなくなって。いろいろの発散剤や小柴胡湯などをのんでもなかなか汗が出ないというもので、患者はかなり重病感を訴える。脈も大きく浮いて力がある。これは漢方でいう三陽の合病というもので、昔から流感の際によくこの証が現われたものらしい。すなわち葛根湯や麻黄湯で発表しても治らない。汗が出ないでかえって高い熱が出る。そこで小柴胡湯を用いても解熱しないし、高熱で口が乾くが、白虎湯でも効かないという三陽病の混合型によいのである。

注6

・目標・応用 感冒で頭痛鼻乾き口渴し不眠、四肢煩疼脈洪数のもの。

注7

・流感性感冒：三十八度内外の発熱で、全身がだるく、体のおきどころがなく、頭痛、胸元が苦しく、食欲がないという場合には、次の柴葛解肌湯がよろしいのです。

注8

・本方は葛根湯と小柴胡湯加石膏を合方した処方で、表位の病邪を麻黄湯などで発汗したが、なお表証が残っていて、しかも病邪が裏位にも侵入して小柴胡湯の証と石膏の証(口渴、煩熱)を帯びてきたものに用いる、いかにも浅田流らしい投網式の処方である。もしこの証で虚証なら柴胡桂枝湯であろう。主に使われるのは流行性感冒で、熱はさ程高くないが頭痛し全身倦怠を感じ、胸苦しく食慾不振の者に用いる。なお、神秘湯の項でも述べたが、柴胡と麻黄の組合せは古方では見られず、後世方でも本方と神秘湯のみであり、配合に疑問が感じられる。流行性感冒。

処方番号：66A

処方名：柴葛湯加川芎辛夷（さいかつとうかせんきゅうしんい）

処方構成：

柴胡 6、半夏 5、黄芩 3、桂枝 5、芍薬 3、葛根 6、麻黄 2、竹節人参 2、甘草 1、大棗 1.2、生姜 2.5、川芎 3、辛夷 2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上のものの次の諸症

効能・効果：

慢性に経過した鼻炎・蓄膿症

原典：

出典：実用漢方処方集

解説：

鼻疾患に頻用する葛根湯加川芎辛夷に小柴胡湯を合方したものである。聖光園細野診療所で頻用する処方であるが、慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎、鼻症状を認める感冒（鼻漏、鼻閉）頭痛、肩凝りなどを認め、胸脇苦満を伴うときに用いる。

本処方適用のポイントは咽喉に後鼻漏を認め、鼻症状（鼻汁、鼻閉）を訴え、胸脇苦満を認めることである。

鼻の炎症は胆熱によるものが多いといわれている。また胃熱の薫蒸も鼻の炎症の持続に関係している。胃熱の薫蒸は葛根湯で清解するが、胆熱は肝胆の熱を瀉す小柴胡湯を加えることが望ましい。従って慢性化した鼻の炎症、慢性鼻炎や慢性副鼻腔炎などは葛根湯加川芎辛夷よりも小柴胡湯を合わせた柴葛湯加川芎辛夷の方が適用機会が多いと考える。

症状により更に桔梗を加えたり、或いは膿の貯留が多い時は排膿散及湯を更に合方することもある。

66A.柴葛湯加川芎辛夷

参考文献名	柴胡	半夏	黄芩	桂枝	芍薬	葛根	麻黄	竹節 人參	甘草	大棗	生姜	川芎	辛夷	用法・用量
東洋医学雑誌	6	3.5	3	5	3	6	2	2	1	1.2	2.5	3	2	

処方番号：67

処方名：柴梗半夏湯（さいきょうはんげとう）

処方構成：

柴胡 4、半夏 4、桔梗 2-3、杏仁 2-3、栝楼仁 2-3、黄芩 2.5、大棗 2.5、枳実 1.5-2、青皮 1.5-2、甘草 1-1.5、生姜 1.5（ヒネシヨウガを使用する場合 2.5）

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上でかぜがこじれたものの次の症状

効能・効果：

腹に響く強度の咳嗽

原典：医学入門

出典：勿誤薬室方函

解説：

浅田の『方函口訣』に「発熱、咳嗽、胸滿、両脇刺痛する者を治す。これ邪熱痰を挟み攻注するなり。この方は「蘊要」の柴胡枳桔湯に青皮、杏仁を加うる者なり。柴胡枳桔湯証にして咳嗽甚だしき者に用ゆ」と記載されている。咳嗽が激しく喀痰も多く実熱証の呼吸器疾患に応用される。臨床では肺炎、気管支炎、肺結核、感冒のこじれなどで咳嗽喀痰が激しく咳が腹にひびくのを目標にして用いる。浅田宗伯はこの様な激しい咳嗽に対し柴陷湯、柴梗半夏湯、柴胡枳桔湯を頻用しているが、それぞれの区別は、柴陷湯は胸にひびく咳、柴梗半夏湯は腹にひびく咳で鑑別している。